好きこそものの上手なれ

第45話

回胴倒錯者

—PACHISLO FREAK—

今回の登場人物

Y班長
礼儀正しい好青年と思っていたが、その発言内容が怪しさを醸し出す。

K君
サクラ事件にて降格させられるが、一般従業員として黙々と仕事をこなす。

T副主任
寡黙で着実に仕事をこなす、元従業員。店の未来を憂い引退済み。

店長
自分勝手でわがまま。それでもつかみどころが無い謎の人物。

Y君と私

開店準備ができるものがいない今、私は実質上の早番固定であるため、自動的に班長のY君、元班長のK君の2人組は遅番固定となる。

今回はお客さんからの情報を確かめるべく、例外的にY班長を早番に入れてみた。こうなると、遅番での従業員が手薄になるため、私が一日中業務をこなす事になる。そのシフトに一番に反応したのは店長だった。

「あれ？なんでYが早番なんだ？お前が通しで一日入るみたいだからいいけどさ」

「はい、この体制が確立されてしまったため、私はあまりY君を直接見たことがありません。たまには彼の働きぶり等を見ないといけないかな、と思いまして」

「ふーん。ま、いいや。頑張ってね」

この質問はY班長からも聞かれ、彼にも同じ返答をした。

当日、Y班長は私よりも早くに到着したらしく、従業員出入り口の前ですでに待機していた。私の顔をみるや、大きな声で「おはようございます」の挨拶。その礼儀正しさは相変わらずである。店の扉を開けると、従業員控え室にてすぐにインカム等の準備をし、私のところにやってきた。

「何をしたらいいですか？」

「他の従業員が来るまで遊んでていいよ」

「あ、はい・・・。」

そういいながら私は、店の電源パネルの操作、コンピューター類の立ち上げ、朝のメールの作成などをしていた。

「電源を入れる順番とかあるんですか？」

そう聞く彼に対し、

「まだ知らなくていい」

「はい、すみませんでした」

すこし冷たい対応に戸惑いを見せながら従業員控え室に入っていった。

Y君と従業員

私が一通り準備を済ます頃、他の従業員が続々と出勤してきた。そしてあらためてY班長が私の元を訪れ、

「主任、従業員たちが出勤してきました、何をさせましょうか？」

「班長という立場では確かにお前は初めての早番だ、しかし早番じたいは初めてではない。何をするのか忘れてしまったか？」

「いえ、そういう訳ではありません・・・。」

「なら知っている仕事をすることだ、分からないことは他の従業員に聞くといい。開店準備はお前よりもベテランばかりだよ」

個々の従業員が確実にいつもの仕事をこなしている。Y班長はただそれを眺めているだけだった。他の一般従業員やアルバイト従業員はそれを見ても何もいわない。班長に対して指導する立場でも命令する立場でもないからだ。

時間をもてあましたY班長が再び私の元にやってくる。

「両替機に入れるお金もアルバイトにさせているんですか？危なくないですか？」

「アルバイトと言っても私と同期だよ。付き合いも長い。私が勝手に信用してるだけだ。試しに両替機のカギを貸してくれと言ってみるといい、彼女はきっと班長であるお前であっても貸さない。」

「店長はアルバイトがお金を触っていることを知ってるんですか？」

「さぁ、どうなんだろう？知ってても知らなくてもどっちでもいいんじゃないか？店長が知るべきは『私』だよ。」

「はぁ・・・、なんだかよく分かりませんが。」

「とりあえずは仕事に戻れ、朝礼はお前に任せよう」

「はい、分かりました」

店が開店してしまうと、遅番の仕事とあまり変わりは無い。Y君は水を得た魚のようにイキイキ、そしてテキパキと動いていたが、それ以上に早番の従業員達は動きがいい。周りが良く見えている、いや、インカムが最大限に活用されていると言った方が適切だろうか。それぞれが自分の状況を伝え合い、そしてそれぞれがそれを聞き逃すことは無い。個人の動きが実際には見えていなくとも、彼らの頭の中にはそれが常に描かれているのだ。

Y班長を早番にした理由、それはお客さんからの情報だけではない。じつはその話を聞いた日、遅番従業員からもY班長の情報が入ってきていたのだ。その情報は耳を疑うような話だったのだ。

「Y班長、ちょっと事務所」

「了解です」

「早番はどうだ？」

「とても動きがよく、皆が熱心です」

「そうか、実はな、すこし前にお前の噂を2件耳にした。お客さんからと従業員からだ。お前は俺や店長がいないとき、インカムで遊んでいるのか？」

「遊んでいるというか、その場の雰囲気を盛り上げようと・・・。」

「そうか、ではなぜ店長や俺がいる時は盛り上げようとしない？さらになぜ従業員から苦情がくる？」

「すいませんでした。」

「2件目、お前はお客さんに設定を教えるらしいが、どういう意図だ？第一お前は設定を知らんだろう」

「その機種の特性とかで、自分なりに設定を予想して・・・。」

「それが正解、不正解関係なく設定の話はせんように。K君の事件も知っているだろ？」

「はい、すいませんでした」

「お前は班長の意味を取り違えている。お前に最も身近な者はアルバイトの子達や一般従業員だよ。今日の様子を見ていると、お前の身近な存在は私のようだ。」

「はい、主任が目標ですから。主任の負担を軽減しようと努力しているつもりです」

「そう言ってくれるのは嬉しいが、従業員の負担の軽減に努めてもらえるかな？それが結果的に俺の負担の軽減になる」

「主任がそういうのであれば・・・。」

残念ながら望みは薄い。なぜかそんな気がした。

評価

早番業務が終了し、従業員たちが私のもとへやってくる。

「Y班長はどうだった？」

「う～ん、微妙。K元班長のほうが害がない？（笑）」

口々に感想を語っていたが、どれも反応はイマイチ。ただ、ある従業員が言った言葉が妙に印象深く記憶に残っている。

「T副主任が一番まともだった」

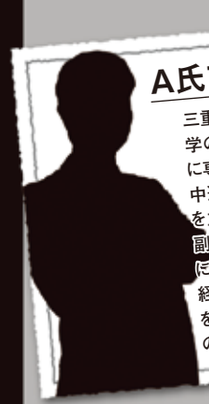
入社するものがあると早番・遅番をいったりきたりで基本的に私の管理下に置かれる。しかし班長になったとたん、私と同じ勤務になることはほとんどない。その開放感と役職者という立場から、Y班長のようになっていったのだと思う。ある程度の知識や技術が身につくとそれが自信となる。さらに昇格したという事実も重なり、それが相乗効果の役割をはたし、危険な勘違いを生んでしまう。私や店長に認められるだけで簡単に昇格できる。これは大きな間違いだった。末端の従業員に認められることが、それに最も近い班長という役職なのだ。知識や技術などその後からでも十分だ。

自分が楽をしたい為に、いつも急いで班長の育成をしていた。今回のように上手くいかなかったときはそれを班長の責任とする。責任転嫁も甚だしい。もっと慎重でなければいけないし、もっと一般従業員の言葉を聴かなければいけない。一般従業員が最も接する機会が多いのは紛れもなく一般従業員同士だからだ。また会社の状態や噂なども末端従業員ほど店のことを知っているものはいない。本社が行う「お客様アンケート」よりも信憑性がある。直接お客さんと会話するから当たり前の話である。

度重なる不祥事でお客さんの減少が続く今、それを打開する案を末端の従業員に頭を下げてでも教えてもらわなければいけないのだ。

■次回予告■

新たに入社する人物が現れる。その新人B君はさっそくY班長と揉め事に・・・。はたしてY君ｖｓB君の結末は？次回「厚情」乞うご期待！



A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。